

## 実施報告「子育て支援ノーバディズ・パーフェクト・プログラム」

### 共同主催者側の立場から

角 田 寛 治<sup>1</sup>

広島文教女子大学心理教育相談センター年報第17号の発行に当たり、平成20年度に貴大学との協働により開催しました「ノーバディズ・パーフェクト・プログラム」について、共催者として報告します。

財団法人ひろしまこども夢財団は、平成8年に広島県が設置した公益法人であり、「みんなで子育て応援」をテーマとして、①情報提供②人材育成・活用③協働事業④特別事業を実施しているところです。

財団では、「はじめから完璧な親はいない!」「戸惑ったり、不安を感じたりしながらの子育てはあなただけではない」、「子育て真っ最中の仲間とおしゃべりしながら自分にあった子育てを考えよう」を柱として、平成18年度から毎年、年2回、人材育成の中の「親育ち講座」の一つとして「ノーバディズ・パーフェクト・プログラム」を実施しています。

そのような中、広島文教女子大学心理教育相談センターで、積極的にこのプログラムを実施していることを財団で行っています「Kids情報送信サービス事業」（会員制のサービスで、12歳以下の子どもをもつ保護者等を対象に、携帯電話のメール機能を活用して、子育て情報を無料で送信するもの。現在会員数は約2万人）を活用していただき、初めて知りました。

大学が主体となつての子育て応援ということで、非常に興味があり、貴大学の「ノーバディズ・パーフェクト・プログラム」が終了した後、実績を教えてもらおうと、心理教育相談センターのスタッフ、学生、各種関係者が一緒にこの講座に取組み、受講したママたちを励まし、地域社会活動に多大に貢献されていることが我々も把握できたところでした。

是非、一度、一緒に子育て応援のための事業に取り組んでいきたいと考えたところ、非常に熱心に我々の話を聞かれ、トントン拍子でひろしまこども夢財団と広島文教女子大学の共催による「ノーバディズ・パーフェクト・プログラム」を開催することができました。

貴大学の学長さんをはじめ、心理教育相談センターの皆さん、学生の皆さん、託児者の方など、皆さんからご理解いただき、開催できましたこと、今でも昨日のごとく記憶しているところです。

これからの子育て応援は、大学、行政、子育てサークル、各種のNPO団体、企業などが単独で実施するのではなく、多様な主体の協働で取り組むことが非常に必要であると考えております。

財団では、「社会全体で子育てしよう!」、「子育てするならわがまちで!」をテーマとして多くの事業に取り組んでいるところです。

「ノーバディズ・パーフェクト・プログラム」を皆さんと一緒に開催できたことは、新たな可能性ができたものであり、財団にとって非常に意味深い取組みであったと感じています。

さて、ノーバディズ・パーフェクト・プログラムは、貴大学と10月～11月までの2カ月間、毎週、木曜日の合計8回、大学内で託児付きで実施したところです。

協働ということで、まずは目的が一致していること。次にお互いをパートナーとして、大事に考えていること。更に、お互いの置かれている状況、得意分野とそうでない分野の把握、何ができ

---

<sup>1</sup>財団法人ひろしまこども夢財団 事業課長

て、何ができないか、或いは今後、少し、調整していかなければいけないものなどを考えていかないと前に進みませんが、これを最初に財団と貴大学の間で詰めていったことを覚えています。

目的の一致、パートナーとして大事ということは、これまでのお互いのやりとりで十分認識できましたが、役割分担、経費分担など、実際に事業を実施していくには避けて通れないものを整理していく必要があります。

一番、難しい部分ですが、この問題を避けてしまうと、後から後から課題がでて、協働がうまく進まず、事業実施後もいい関係でいるといったことも難しくなります。

大学と継続的にいい関係でいて、みんなで子育て応援を実施していくということを実行するためにも、初めごろに、お互いができること、できないことを理解し、調整が少し必要な部分はお互いが検討してみることが大事だと、あらためて感じました。

振り返りますと、大学には、大学全体で取り組んでくれること、進行役となるファシリテーターがいること、大学の会場やおもちゃなどもあること、駐車場も講座の時間は比較的、自由に使えること、大学生が託児のボランティアやチラシの作成などに参加できることなど、たくさんのできること、得意なことがありました。財団だけで実施するのは全然違います。

一方、財団では、市町、子育てサークル、子育て支援者などのネットワークがあること、情報配信力があり参加者を集うことが比較的得意であること、事務局があるため日々の申し込み受付、電話対応などができること、多くはないですが「ノーバディズ・パーフェクト・プログラム」実施の予算を確保していたことなどがありました。

大学の得意な分野、財団の得意な分野などを話し合ったり、メールしあったり、最初に取り決めたことが最後まで守られ、結果として円滑に進行でき、更にはお互いに信頼関係が築けたことが大きな財産だと感じています。

参加されたママたちのアンケート結果をみると、「子育てに前向きに考えられるようになった」、「自分だけが大変ではないんだ」、「相談することが大事と感じた」、「参加者との繋がりを今後とももちたい」など、ノーバディズ・パーフェクト・プログラムを実施したことが、参加者に非常によい結果をもたらしています。

また、託児については、専門家、経験者の方以外にも、大学生が多数、ボランティアとして参加し、講座を受講しているママたちからの評判もよく、安心して、講座を進められましたことを感謝しています。

少子化などの影響により、これまで、小さなお子さんと一緒に過ごした経験の少ない、若い方が増えてきていますが、経験のないことで、将来、親になった時、子育てに悩むことも指摘されているところです。

次世代育成の観点からも、子育て応援事業、研修事業の中で、大学生が赤ちゃんや小さなお子さんと接する機会がもて、更に、ママたちと接することで、ママたちの悩み、子育ての充実、喜びを生で聞く機会がもてたことも忘れてはいけないことだと思います。

広島文教女子大学との協働での取組を契機として、今、財団では、県内の大学とのコラボで子育て応援事業に取り組んでいます。

地域の社会資源である貴大学が子育て応援をテーマとして、これからも地域社会に貢献されることを期待するとともに、財団では、これからも、貴大学との協働による子育て応援に積極的に進めていきたいと考えています。

この度、心理教育相談センター年報第17号への執筆をさせていただく機会をいただいたことを深く感謝いたしますとともに、今後とも、貴大学の益々の発展を期待しています。